

共同研究支援報告書

氏名	田口 佳代子		
所属大学名	千葉大学子どものこころの発達教育研究センター		
職位	特任助教		
研究題目	アジアの日本人学校におけるメンタルヘルス支援体制整備のためのパイロット研究 -東南アジア諸国における実態調査-		
	短期支援(1年)	長期支援(3年)	年目
本年度の内容報告	本研究では、東南アジアの日本人学校に対し、メンタルヘルスケアに関する実態調査を行うこと、メンタルヘルスに関するビデオコンテンツを開発し、その実現可能性を検証することを目的とした。さらに、本研究の発達障害に関する動画コンテンツを文化背景を考慮しつつ多言語化し、多様な環境や人種に対する有効性を検証することを目的とした。 【アジアの在外日本人学校6校における実態調査の結果】有効回答数は217名であり、台湾93名、インドネシア69名、マレーシア45名、その他10名であった。各日本人学校の連絡メールにてリクルートを行い、アンケートはgoogle formにて回収するものとした。回答は任意であった。被験者は在外教員、保護者であり、保護者からみた子供の様子を合わせて調査した。海外生活によるストレスは7割が「有」と回答し、最も大きな要因は言葉であった。人間関係によるストレスも7割が「有」と回答し、最も大きな要因は子供との関係性であった。今後の見通しについては8割以上がストレスを抱えており、最も大きな要因は子供の将来であり、自身のキャリア、経済的な不安と続いた。一方で8割以上がストレスの軽減方法を持っており、趣味を楽しむことや一時帰国によりストレスが軽減できるとのことであった。調査では子供に関する不安が目立ち、心配事の中心は、発達障害のこと、適応が難しいこと等がメインとして挙げられた。しかしながら、発達障がいについて等を医療機関、相談機関に相談している割合は12%に過ぎず、子供の発達が気になるとしながら実際に診断を受けている子供は全体の13%にとどまった。子どもの情緒や行動についての保護者評価(SDQ)では、国内にいる子どもたちより海外に住む子供達のほうが情緒や行動の問題が大きいことが示唆された(n=236)。在住者(保護者、教員)の心身の評価は全体的に「正常値」であり、ストレスがうまくケアできない人は約1割にとどまった。 【考察】先行研究では多くは孤独感、情報不足、支援アクセスの不良等により、心身状態の悪化が報告されている。今回のこの結果は、「日本人学校」という比較的安定した生活環境にあること、ポストコロナ期でオンラインツールの普及がコーピングを高めた可能性がある。一方で、学校を介しての調査であり自身の回答が漏れるのではないかという不安や、元気なんだ、大丈夫なんだという心理的プレッシャーから軽度の不調を深刻でできなかった可能性も考慮すべきである。生活への適応は時間と共に進むが、発達特性のある子供への支援体制が整っていないことは継続的な不安要素になっている。医療的支援のアクセス困難が親の「気づき」や「初期対応」を妨げており、初期段階での動画支援の必要性は高いと考えられる。ただしメンタルケアの動画パッケージの利用率は非常に低く、予防や早期対応に対する意識や、動画支援に対する抵抗感など、さらなる評価が必要である。教員や保護者自身が困った時に自発的利用するのではなく、適切な動画をガイドする人が必要である可能性がある。 【動画の多言語化についての進捗】マラヤ大学ではマレー語版、英語版、州立ジャカルタ大学でインドネシア版を作成し、2025年に各国でケースコントロールスタディを実施する予定である。マラヤ大学では研究デザイン、動画の選定、研究スケジュールを共有しており、5つの動画の翻訳版作成をすすめている。州立ジャカルタ大学では4つのインドネシア版動画が完成しており、動画の妥当性と文化的背景の齟齬について研究者同士でのディスカッションを持ち、さらなる編集を進めている。インドネシアでは10個の動画の作成と検証を予定している。		
成果(論文発表等)	結果の論文文化について準備中		
備考			